

市民が創る くらしたい栗原

はじめに

栗原市は、平成17年4月、旧栗原郡10町村が合併し誕生しました。宮城県の内陸北部に位置し、面積は805km²と宮城県内一広く、秀峰「栗駒山」、野鳥の宝庫「伊豆沼・内沼」をはじめ、自然豊かな田園都市です。高速道路の2つのインターチェンジと東北新幹線くりこま高原駅といった高速交通体系も整備され、首都圏からのアクセスにも恵まれています。

さらには先人が築き上げた歴史や文化が継承されており、古くから奥州街道の宿場として栄え、藩主や各藩重臣が通行の際に宿泊した「旧有壁宿本陣」や、宮城県から秋田県に通じる関所である「仙台藩仙北御境目寒湯番所」など、現在でも当時を忍ばせる史跡があ

ちらこちらに残っています。

これらの地域の魅力を最大限に生かし、「市民が創るくらしたい栗原」を基本理念として市政運営に取り組み、基幹産業である農業を核とした6次産業の推進や子育て支援策の充実など、日本一のまちづくりを目指しています。

若者定住のまちづくり

全国的に少子高齢化が進む中で、本市でも人口が減少傾向にあります。この深刻な状況に歯止めを掛けるためには大胆な施策が必要であると考え、平成28年度を目標とした「新たな7つの成長戦略」を掲げました。特に、人口減少の抑制と若年層の移住・定住を促進するための施策として、平成25年7月に「定住促進室」を設置し、独自の事業を展開しています。

一例を挙げれば、若者の就労機

会の多様化や結婚観の変化などにより未婚化や晩婚化が進んできていることから、独身の男女の仲をサポートする婚活プランナーの認定や、わが子の結婚を真剣に考えている親同士の交流会の開催など結婚対策に取り組み、独身男女の出会いの場として「スイーツであま〜い出会いくりはら甘コン」など、趣向を凝らした婚活イベントも開催しています。

これらの事業に加え、工業団地や定住促進住宅の整備、そして、本市へ移住、定住してもらうため「みんなで『イイね!!』をシェアするまち 住まいる栗原シェアリングタウン」として宅地分譲を行うなど、「ずっと住み続けたい」「栗原市に住んでみたい」と思っただけの魅力あるまちづくりのた

め、全庁挙げて、組織横断的に取り組んでいます。

復興への思い 栗駒山麓ジオパーク

平成20年6月14日に発生した岩手・宮城内陸地震により、本市は震度6強を記録し、甚大な被害を受けました。特に、荒砥沢ダムの北側で起きた「大規模な地滑り」は国内最大級の規模で、現在でも当時の様子やつめ跡が分かるほどであり、非常に貴重な「地質遺産」であると考えています。

このことから、地震の記録や崩落地の地形・景観を、防災の教育や学術研究、さらに観光への活用、そして、復興に結び付けるため、「栗駒山麓ジオパーク構想」を掲げ、現在、平成27年度の「日本ジオパーク」認定に向け活動しています。

鎮魂と防災への強い思い、そして被害を受けた市民生活の再生、産業の再建を果たすこと、さらには、ここで起こった日本最大級の



栗駒山と田園を舞う白鳥

地滑りや、災害時の様子を語り伝えることは、日本という地震列島で生きるための「人の知恵」となるものであり、「防災の聖地」として、ここに来れば誰もが防災を学べるようなジオパークを目指しています。

また、珍しい地形・地質を見せる自然の公園だけではなく、ラムサール条約登録湿地である伊豆沼・内沼などの水資源や、栗駒山や世界谷地などの自然資源、長屋門や古道といった歴史・文化資源、豊かな田園地帯と、清らかな水はぐくんだ食文化などを生かし「栗原市全域をジオパーク」とし

た想定エリアとして計画を進めています。

そして、将来的には、既にジオパークに認定されている秋田県湯沢市の「ゆざわジオパーク」や、東日本大震災により被害を受けた東北沿岸部の三陸ジオパークと連携する予定であり、これにより地域が活性化する「きっかけ」となることを期待しています。これらの被災地は、互いに「復興への想い」を強く持つもの同士として、力強くつながっています。この想いは、それぞれに壮絶な経験をした被災地をつなぎ止める、まさに復興・防災への想いのネットワークとして、いつの日か大きな要となり、互いのジオパークで語り継いでいくことが、私たちの責務であると考えています。

合併から10年 さらなる発展へ

現在、震災からの復旧・復興を進めるとともに、大震災などで激減した観光客数を増やす取り組みや、企業誘致による雇用の場の確保、子育て支援の充実と若者の定住促進、教育環境や医療・福祉の充実など、「新たな7つの成長戦

略」に掲げた施策を展開すること
で、「市民が創るくらしたい栗原」
の実現に向け「もっと前進」して
いくものと確信しています。
平成27年度は合併から10周年の
節目の年となります。
合併10周年を記念する行事とし
て、栗原ドリームアンバサダーの
皆様のご協力をいただきながら
、さまざまなイベントを企画し

ています。
合併後2度にわたり大震災に見
舞われ、全国から寄せられた温か
いご支援に報いるためにも、これ
らのイベントを通じながら、栗原
の魅力を、そして元気な姿を全国
に向け発信していきます。
栗原市のさらなる発展と、20年
後、30年後につながる道標とし
て、深く心に刻みながら。

プロフィール

- ◆ 面積 804.93 km²
- ◆ 人口 7万2881人
- ◆ 世帯数 2万4829世帯

〔将来都市像〕市民が創るくらしたい栗原

〔まちの特徴〕栗駒山をはじめとする美しい山々や、その麓に広がる田園地帯、迫川や伊豆沼・内沼などの豊かな自然に恵まれたまち

〔市町村合併〕平成17年4月1日、築館町、若柳町、栗駒町、高清水町、一迫町、瀬峰町、鶯沢町、金成町、志波



栗原市長
佐藤 勇



〔市町村合併〕平成17年4月1日、築館町、若柳町、栗駒町、高清水町、一迫町、瀬峰町、鶯沢町、金成町、志波

〔まちの特徴〕栗駒山をはじめとする美しい山々や、その麓に広がる田園地帯、迫川や伊豆沼・内沼などの豊かな自然に恵まれたまち

〔市町村合併〕平成17年4月1日、築館町、若柳町、栗駒町、高清水町、一迫町、瀬峰町、鶯沢町、金成町、志波

〔観光〕国定公園栗駒山、世界谷地、伊豆沼・内沼、山王史跡公園、浅布溪谷、細倉マインパーク

〔イベント〕栗原市民まつり、くりこま山車まつり、つきだて薬師まつり、栗原市せみね桜まつり

姫町、花山村の9町1村対等合併

〔特産品〕そばだんご、栗駒耕英産イワナ、若柳牛、そばはっと、正藍染、若柳地織

※面積は国土地理院「全国都道府県市区町村別面積調」に、人口・世帯数は「住民基本台帳」による。

わが

市民と築く美しい景観のまち

歴史と文化が息づくまち

市川市は千葉県の西北部に位置し、江戸川を隔てて東京都に隣接しています。地域のほとんどが都心から20kmの圏内に含まれることから交通網が発達し、都心への通勤が便利な住宅都市として発展してまいりました。



地域ブランド「市川の梨」

いちかわ

市川市(千葉県)

市川に人が住み始めたのは、今から約2万年前といわれています。

東京湾に面していることから、全国でも有数の規模を誇る縄文時代の馬蹄形貝塚など、先人たちの生活の様子をうかがうことができる遺跡が数多くあります。

奈良時代には下総の国府が置かれ、万葉集の和歌には、市川に住んだ手児奈(てこな)という美しい娘の伝説が詠われています。

また、本市は全国一の梨生産地である千葉県の中でも、市町村別産出額がトップクラスを誇る一大産地であり、特許庁の地域ブランドの認証を受けて「市川の梨」として全国に出荷されています。

「住み続けたい」と思う、
美しい景観のまち

住宅都市として発展してきた本

市においては、市民に愛されるまち並みをつくり、維持・保全していくことが重要です。

私は、まち並みは私たちの生活を映し出すものと考えております。

例えば通勤通学から帰宅した市民を迎える穏やかでくつろげるまち並みの存在は、日々の生活の潤いとなります。また、子どもや高齢者など地域で生活する人の心を豊かにしてくれます。

そこで、美しい景観のまちづくりを担当する部署として「まち並み景観整備課」を設置し、積極的に景観形成に取り組んでいます。住宅地のガーデニングや塀のない開放的な空間の創出、花や街路樹による道路や駅前景観の充実、寺社の参道や歴史ある建物などの修景により、人々に愛されるまち並みを実現してまいります。

行財政改革の取り組み

都心に近く利便性が高い住宅都市として発展してきた本市においても、ここ数年は、景気が低迷し、税収が伸び悩む中で、厳しい財政運営を行っていかねばなりませんでした。

本市の歳入は、市税が約60%を占めており、社会経済情勢の変化が大きく影響します。本市の税収は、平成20年のリーマンショック後に減少しましたが、国の経済政策などの効果から近年回復傾向となり、平成26年度、3年ぶりに地方交付税不交付団体に移行し自主財源の割合はさらに高くなっています。

私は、47万人都市を経営していく姿勢として、市民サービスの充実を図るとともに、健全な行財政運営の実現を目指しております。そのためには自主財源を確保することと、市民目線・企業経営の視点で行財政改革を進めていくことが重要と考えております。

市長就任後、市民や有識者から構成される「市政戦略会議」を設置し、行財政改革などに関して貴重なご意見をいただいております。

特に、平成25年度には、公民館などの公の施設の使用料に関して、大きく見直すよう答申をいただきました。その後、安定経営の実現と、受益者負担の適正化について、さまざまな側面から市民とともに検討した結果、使用料金については、現在の3倍を上限として改正し、平成27年度中に実施することが決まりました。併せて、道路占有料の見直しも行われること

になっていきます。このような改革は、市民の痛みを伴うものではありませんが、10年後の本市のために、今必要なことと考えております。さらに、現在直営で管理してい



江戸川区と同時開催の「市川市民納涼花火大会」(来場人数:139万人)

る地方卸売市場や保育園などについて、民営化などの経営主体の見直しを進めるため、私が直接指揮を執る経営改革室を設置したところです。また、人事給与制度につきましても職員のモチベーションの向上と給与水準の適正化の観点で改革を進めております。

次の世代に引き継ぐために

本市は昭和9年の市制施行から平成26年で80年を迎えました。先人たちの努力により築かれたまちを、さらに発展させ次世代に引き継ぐ手段の一つとして、多くの人に市川の魅力を知っていただき、訪れていただく取り組みを進めております。

温暖な気候と風光明媚な土地柄を愛して市川に住んだ多くの文人、芸術家た

ちの足跡を市内の観光拠点として整備し、まち歩きしやすい回遊マップを作成するなど、市外からの観光客も楽しめる

よう工夫しております。

また、平成23年度からは市民とともに推進する花と緑が豊かな魅力あるまちづくりとして「ガーデニング・シティ いちかわ」を実施しています。丹精込めてつくり上げたご自宅の庭を一般に公開する「オープンガーデン」は、市民交流の場としてにぎわっています。

また、耐震性の不足やバリアフリー化が遅れている市庁舎については、平成32年度完成に向けて建

プロフィール

- ◆ 面積 56・39 km²
- ◆ 人口 47万2775人
- ◆ 世帯数 22万7927世帯

〔将来都市像〕ともに築く自然とやさしさがあふれる文化のまち いちかわ
 〔まちの特徴〕江戸川を隔てて東京都と隣接しながらも、緑地と水辺の自然環境に恵まれた、歴史と文化のまち
 〔特産品〕市川の梨(地域ブランド)、



市川市長 大久保 博



海苔、トマト、ネギ、大根、いちかわバラ物語(和・洋菓子)
 〔観光〕中山法華経寺、里見公園、市立動物園、市川市東山魁夷記念館、アイ・リンクタウン展望施設、
 〔イベント〕市川市民納涼花火大会、市川市民まつり、市川市民元旦マラソン、下総・江戸川ツーデーマーチ

設計画を進めております。新庁舎は、市民サービスの拠点、防災の拠点としての役割を担い、さらに、市民活動の拠点として「協働テラス(仮称)」の設置を検討しております。

これからも、市民の皆さまがまちに愛着や魅力を感じることができ、多くの人に住んでみたい、住み続けたいと思っただけの質の高いまちを目指して市政運営に取り組んでまいります。

※面積は国土地理院「全国都道府県市区町村別面積調」に、人口・世帯数は「住民基本台帳」による。

わが

みなんで築く「ささえあい」と
「活力」の都市を目指して

はじめに

みよし市は、昭和33年4月に人口9043人で町制を施行し、昭和36年の愛知用水の通水が豊かな水の恵みをもたらし、農業生産は飛躍的に向上しました。また、町制施行当時より積極的に企業誘致を進め、自動車関連産業をはじめとする数多くの優良企業の進出により確固たる財政基盤が確立し、就労の機会が充実するなど活力あるまちへと大きく変貌しました。昭和54年には、名鉄豊田線の開通を契機に「三好ヶ丘駅」「黒笹駅」を中心とした大規模な住宅開発が進み、多くの皆さんが移り住まれ、現在の人口はおよそ6万人。実に町制施行時の6倍という人口規模にまで発展し、平成22年1月に愛知県で36番目の市となりました。

また、カヌー競技をはじめとするスポーツの振興や市内70カ所に彫刻作品を展示する、アートのあるまちづくりにも取り組んできました。まちの風物詩となっている「三好池まつり」「三好いいじゃんまつり」「三好大提灯まつり」の夏の三大まつりは、市内外から訪れた多くの皆さんの心に潤いと感動を与え、交流の輪が広がるなど、魅力あるイベントとして親しまれています。

魅力ある活力と
にぎわいのまち

本市は、歴史文化や地域資源を生かしながら、愛着と誇りを持つ新しい魅力をつくりつちかい、生き生きとしたにぎわいのあるまちを目指しています。そこで、子どもからお年寄りまで、あらゆる世代を対象にしたスポーツ振興に力を注ぎ、市民の皆さんが明るく健康的な暮らしを実現できるよう、体育祭やマラソン駅伝大会などの催しを数多く開催しています。

中でも力を入れているのがカヌー競技。平成6年の「わかしゃち」国体でカヌー競技が開催されて以来、「カヌーのまち」としてカヌーポロの普及など多彩な施策を推進してきました。その結果、三好池ではレーシング競技、保田ヶ池ではカヌーポロの常設コートを構え、日本有数の競技場として毎年多くの大会が開催されています。平成16年には、アジア初となるカヌーポロの世界大会「第6回世界カヌーポロ選手権大会」の舞台となり、各国の選手たちによる熱いドラマが繰り広げられました。

また、平成15年からは誰でも、簡単に、楽しく、交流できる、環境に配慮した10人乗り手漕ぎゴムボート「Eボート」を使った交流会を毎年実施しています。

文化・芸術に親しみ・
はぐくむまち

本市は、文化や芸術に親しみながら心豊かに暮らせるまちを目指しています。平成28年に開館予定の図書館機能や生涯学習機能、交流機能を備えた「(仮称)図書館学習交流プラザ」の整備をはじめ、文化センターサンアートでは音楽や演劇、歴史民俗資料館では企画展を定期的に開催し、文化・芸術の充実を図っています。

また、平成26年11月3日には、市内に現存する明治時代の建物として昔ながらの姿を良好に維持しており当時の生活文化を伝える、市指定文化財「石川家住宅」がオープン。初代三好村の村長を務めた石川愛次郎氏いしかわあいじろうから息子正雄氏まさお、正雄氏の息子恒夫氏つねおまでおよそ

100年間守られてきたこの家屋には、現在の生活様式では見ることの少ない長屋門や蔵などがほとんど当時のまま維持されており、後世に伝える文化施設として利用していきたいと考えています。

ほかにも、市内各所に70点の彫刻を設置し、誰もが自由に芸術に触れる機会を提供しています。この作品は、平成元年度から「アートのある暮らし」をコンセプトに開催された「アートヒル三好ヶ丘彫刻フェスタ」で、平成15年度の最終年までに入選した作品で、この企画は平成13年に、地域文化の形成に貢献し、また、人と人との新しいコミュニケーションを提案



市指定文化財「石川家住宅」の長屋門

している点が高く評価されグッドデザイン賞を受賞しました。

**みんなで助け合える
福祉のまち**

本市の高齢化率（平成26年11月1日現在）は16%台と全国の平均と比較して低い水準ではありますが、地区によっては30%を超えるところもあり、また、団塊世代が10年後には75歳になることから高齢化社会への対策が必要となつてきています。そこで本市では、認知症サポーターの養成や回想法などの事業を積極的に展開しています。

認知症サポーターとは、認知症についての正しい知識を持ち、日常生活で認知症の人と出会ったときに適切な対応ができるボランティアのこと。本市では、小学生を含め多くの人が認知症サポーター養成講座を受講し、現在はおよそ9280人のサポーターがいます。今後も年間1500人を対象に講座を開催していきます。

また回想法とは、懐かしい写真や絵を見たり触れて会話したりして、昔の体験を思い出すことで精神の安定を図る心理療法ののこと。

本市では、市内にある特別養護老人ホームとの協働により、高齢者の認知症予防や進行抑制に努めています。

ほかにも、認知症の有無を問わず、誰でも参加できる「認知症カフェ」や高齢者を介護する家族を対象とした「地域サロン」などを開催し、より一層生きがいを持つて安心して暮らせるまちづくりに取り組んでいきます。

プロフィール

- ◆ 面積 32・11km²
- ◆ 人口 5万9671人
- ◆ 世帯数 2万2468世帯

〔将来都市像〕みんなで築きあげる成熟したまちみよし

〔まちの特徴〕豊かな自然と活気あふれる産業、香り高い文化の調和がとれた住環境に恵まれたまち

〔特産品〕柿、ナシ、ブドウ、ウメ、柿酢ドリンク「いいじゃん美人」、みよし梅ワイン「あざみ野」、梅干し「あ



みよし市長
小野田賢治



ざぶばあちゃんの手づくり梅干し」、梨の実シユース

〔観光〕三好稻荷閣、福谷城跡、石川家住宅

〔イベント〕三好池桜マラソン、保田ヶ池カップカヌーポロ大会、三好池まつり、三好いいじゃんまつり、三好大提灯まつり、三好八幡社秋の大祭、産業フェスタみよし、新春みよし市マラソン駅伝大会



小学校で開催された「認知症サポーター養成講座」の様子

※ 面積は国土地理院「全国都道府県市区町村別面積調」に、人口・世帯数は「住民基本台帳」による。

「つながりの豊かなまち」を目指して

はじめに

沖縄本島の南端に位置する糸満市は、那覇空港から約10分の距離にあり太平洋と東シナ海が織りなす青や、サトウキビや野菜類の緑、年間を通して咲き誇る草花の赤など、南国の島らしい色彩が溢れるまちです。

沖縄戦終焉の地である本市は、全国唯一の戦跡国定公園を有し、平和祈念資料館やひめゆりの塔、各県の慰霊碑などが置かれています。恒久平和の祈りの場として修学旅行生や慰霊団を受け入れ、風化させてはならない記憶を次世代へ正しく伝える平和都市として重要な使命を担っています。

また、多くの自然の恵みを受けて発展してきた歴史から、地域特性を考慮した新エネルギーの利用

や省エネ対策に積極的な取り組みをしています。ごみの資源化や市庁舎における太陽光発電の導入、糸満市観光農園の風力発電、公共施設のLED照明化など、地球にやさしい事業や「新エネ百選」「次世代エネルギーパーク」の認定を受けていることから、県内外から関心を集めています。



「新エネ百選」に選定された「糸満市庁舎」と沖縄振興一括交付金を活用した「電気自動車」

子どもたちの笑顔が溢れるまちづくり

平成20年の市長就任後、最も力を注いでいるのが、「一人ひとりの子どもが健やかに成長できる社会の実現」です。共働き世帯が多く、待機児童の解消は、地域の大きな課題であったため、保育所の受け入れ枠を380人分拡充しました。また、並行して働く機会の創造に努め、700名を超える新規雇用を生み出しました。その結果、合計特殊出生率1・99と全国平均と比べ極めて高い値を維持し、0歳から4歳までの5歳年齢階級が3年前と比べ233人増、さらに人口も1200人増と、節目であった6万人を平成26年10月に達成することができました。今後とも、保育施設の認可や増

改築などにより2000人を超える入所児童定員を増やすなど、本市の強みである子育て支援施策を一層充実させるとともに、雇用拡大に努め、人口減少時代にあっても力強く発展する市政運営に取り組んでまいります。

地域の魅力を生かした産業振興

太平洋と東シナ海が交差し、豊かな魚場に恵まれていることから、古くから漁業のまちとして栄えてきました。また、本県唯一の第三種漁港を有し、南方漁業への前進・中継基地および水産物流通拠点漁港として多くの県外船を受け入れています。

漁港背後地には水産加工団地や地域の特産品を販売する道の駅など、一次産業から三次産業まで切れ目のない環境整備により、年間100万人を超える来場者でにぎわう商業施設に成長しています。今後とも、活力ある水産都市としての環境整備に取り組みとともに



糸満市特産「美(ちゅ)らキャロット」

に、多様な産業連携を見据えた振興策を推進してまいります。

一方、農業の分野においても、沖縄本島の野菜どころとして知られ、ニンジン、レタス、ゴーヤーのほか、パッションフルーツ、小菊、肉用牛が拠点産地として認定を受けています。

市としても、地下ダムの利用促進や下水道再生水の利用可能性調査への協力など、「水あり農業」の拡大に取り組みとともに小規模農家支援と島ヤサイの生産消費の拡大、畜産の優良系統種導入など地域の新たなブランドづくりを推進し、農業力のさらなる向上に努めているところであります。

観光にあつては、平和学習や慰霊団の受け入れなど沖縄の初期型観光を支えてきました。しかし、本島北部の観光施設設置や体験型観光への対応の遅れなどにより、多くの修学旅行生を受け入れる平和祈念資料館でさえ大幅な入館者の減が続き、市域を超えた観光振興策の強化が求められています。

そのため、伝統、文化、暮らし、産業、平和、エコをはじめ、地域の特色に磨きを掛け、観光資源化する「誰もが訪れたいくなるまちづくり」事業を実施しています。本事業は、市全体を屋根の無い博物館に見立て、漁村の街並み保全や沖縄らしい暮らしの体験、地域の歴史や文化・平和の語り部育成、市内観光地へのアクセスを確保するための公共交通整備、さらに本島南部の観光資源の情報を提供する観光センターの設置など、「人と人」「今と未来」「まちとまち」をつなぐ、仕組みづくりに取り組んでいるところであります。

観光は本県のリーディング産業として位置付けられていること

から、国・県と連動しつつ、糸満市らしい施策の展開に努めてまいります。

むすびに

厳しい財政状況、失業者や生活保護世帯の増加、待機児童問題、環境対策、少子高齢社会の到来、地域の空洞化、それぞれが混在し広がる社会不安など、まちづくりには多くの課題があります。本市にあつては、それぞれの立場を理

プロフィール



- ◆ 面積 46・63 km²
- ◆ 人口 6万125人
- ◆ 世帯数 2万3936世帯
- 〔将来都市像〕つながりの豊かなまち
- 〔まちの特徴〕美しい自然と地域に根差した独自の伝統と文化を大切に守り、引き継いできたまち
- 〔特産品〕かまぼこ、花卉、ニンジン、レタス、ゴーヤー、パッションフルーツ、ガラス工芸



ツ、ガラス工芸

〔観光〕ひめゆりの塔、平和の礎、白銀堂、具志川城跡、南山城跡、糸満市観光農園、美々ビーチ

〔イベント〕糸満ハレレ、糸満大綱引、糸満ふるさと祭り、いとまんピースフルイルミネーション、糸満市長杯サイフィンコンテスト、なんぶトリムマラソン

※ 面積は国土地理院「全国都道府県市区町村別面積調」に、人口・世帯数は「住民基本台帳」による。